

ハゲタカ物語

A short story on “A Lazy peasant & Vulture-man”

池田光穂



(写真はウィキペディア (英語) より：出典：<http://en.wikipedia.org/wiki/File:Coragyps-atratus-001.jpg>)

私が好きな民話に「怠惰な男とハゲタカ男」という物語がある。民話の語り手は、中央アメリカ・グアテマラ共和国の西部高地のママ語を話すマヤ系の先住民たちである。この物語については、私がそれを愛するがゆえに各地での世間話のついでに人にいろいろ聞いてみて、多少の異同はあるものの、マヤの言語集団を越えてさまざまな各地で語りつがれていることを実際に確認している。スペイン語でのタイトルは *El hombre perezoso y el hombre zopilote* と対句で表現されるので「怠惰な人間とハゲタカ人間」とでも翻訳できよう。後者のハゲタカ (スペイン語では *zopilote*、ママ語では *k'utz*、カクチケル語では *k'üch*) ——*k'*は声門化した無声軟口蓋閉鎖音、他方 *ü* は高後舌弛緩母音、英語の発音では *put* の母音のように発音する——は、ハゲタカ男あるいはハゲタカ人間 *xjal k'utz* (シハル・クッツ) は人間と同等の中味の存在で、ただ着ている「衣装」が人間とは異なるというのが特徴である。私が記憶——というか今では伝統文化に明るくない先住民の子どもたちに私自身が「語り部」になって話しているので、私の修辞も盛り込まれている——している、この物語の梗概は以下のようなものである。

ある村に怠惰な農夫がいました。彼はトウモロコシ畑で仕事をするのがとても嫌で、いつも奥さんに小言を言われていました。今日も畑で仕事をせず、ぼおーっと空を見上げています。空には高くハゲタカが獲物を探して旋回しています。「ああ、ハゲタカはいいなあ、ああやってのんびり空を旋回できて」と怠惰な男はため息をついています。それを聞きつけた一羽のハゲタカは、空から降りてきて、怠惰な男に「おい、そんなにハゲタカがいいのか？俺は人間になりたいんだ。どうだ？俺の着て

いる衣装と君の衣装を取り換えっこしないか？」と持ちかけました。男は喜んで「本当か？ではそうしよう！」と言って、その話に乗ることにしました。ハゲタカは自分の黒い羽根の衣装を、男の人間の姿と取り換えっこしました〔註：男が衣装を脱ぐとどんな姿になるのかは説明されない〕。怠惰な男は、ハゲタカになり空を悠々と飛ぶことができ、すごく満足しました。他方、ハゲタカ男は、トウモロコシ畑に戻って一生懸命に働き、それまで雑草の生えたままになった畑がすっかりきれいになりました。家に帰ったら、すっかり働き者になった夫に、奥さんが「あんた、どうしてこんなに働きものになったの！」と驚き、それまでの態度とは一変して心から夫に尽くすようになりました。それからというものハゲタカ男は畑でますます一生懸命働くようになりました。他方、空を飛んでいた今はハゲタカの元農夫は、最初は喜んで空を旋回していたものの、やがてそれに飽き、お腹が空いてきました。しかし仲間と共に降り立った食事の場所とは、ごみ捨て場であり、食事とはうち捨てられた獣の腐肉やゴミでした。「うへーっ、これはたまらん」とハゲタカの元農夫は、再び空に舞い戻り、現在は農夫のハゲタカ男のところに戻ってきました。ハゲタカ男に「もうハゲタカの生活は飽きたので、ふたたび衣装を取り換えてくれないか？」と言いました。勤勉になったハゲタカ男は「俺は人間になり畑で働くことに満足している、君は怠惰だからハゲタカになることを望んだのだろう」といってとりあってくれませんでした、とき。

私がこの民話を最初に聞いたのは、1990年代の中頃に習っていたマヤ諸語のひとつマム語の先生からであった。外国人にマヤの文化——その中には内戦の虐殺と内戦記憶を諸外国に伝えるという政治的意義もあった——を知ってもらうためにスペイン語を教える NGO の語学学校の中では、私は唯一のマム語学習の生徒であった。私のコンパドレ（＝洗礼の名付け親と両親とのあいだの儀礼的親族）が、バイリンガル教育の研修を受けたことのあるこの学校の同僚の教師を紹介してくれたのである。資金の貧しい学校——数年後に用途不明会計問題で破産して閉校になる——の庇（ひさし）もまた柵もない屋上の全方位オープンはこの町の標高3,000mの壁のような峰に囲まれた谷をみあげながら、この話を聞いたのである。もちろんマム語の教材として現地語で記載し、スペイン語での対訳を付して。いうまでもなくハゲタカはこの地では常在種（American Black Vulture：学名 *Coragyps atratus*）で、天気の良い午後にはいつも空に大きく輪を描いて飛んでいる姿を認めることができる。マヤの民話には他にも動物の変身譚があり、ケチな婆さんがネズミに変身するなど、生き方のモラルと動物への変身が関連づけられているのだろうと、私はそれほど気にはとめなかった。

まったく勤労を旨とする農民への、よくある勤勉・勤労のすすめという訓話と言えないことはない。なぜなら怠惰な生活をし〔怠惰な生活をしているように見える〕ハゲタカ生活に憧れてしまうと、ハゲタカの甘言に乗ってしまい、とうとう最後は「本物の」ハゲタカになってしまい腐肉を喰らうことを余儀なくされるのだ、ということをこの民話は我々に論しているからである。しかし、ここで私が気になるのは、その民話的想像力の中で語られている存在論的位相である。すなわち動物と人間が「衣装」を変えるだけで変身（変換）できるということであり、また人間と動物は、思考し自分の意思を

もち行動することで、我々とは別個の資格をもった「独自」の存在であることだ。ハゲタカにしても、ネズミにしても、マヤの先住民と同じ世界を生きている存在論的他者であり、人間の衣装を交換すれば我々も他の動物に変身できるし、また人間と他者の動物の関係は、表面的な外見上の違いと、中味の共通性（ただし民話の中ではそれが視覚的ビジョンでは示されない）が特徴である。これはフランスの構造主義人類学者で、今はレヴィ＝ストロースの後任としてコレージュ・ド・フランスの人類学の主任の席を占めるフィリップ・ディスコラのいう、身体性（±）と内面性（±）に関する4つの「同一化の様相（mode of identification）」の種類からいうと、身体性（-）と内面性（+）という点で、彼の分類するアニミズムの論理に相当するものである [DESCOLA 2006:3-6]。

マヤを含めたメソアメリカと呼ばれる文化圏では、ナグアルあるいはナワール (nagual, nahual) に関する信仰がある。アステカのナワトル語ではカレンダーと日付に関連づけられた動物（あるいはそれに励起させられる力）を意味するトナルあるいはトナリ (tonal, tonalli) という語がある。ナワトル語で tonal-li は太陽の暖かさ、夏期、そして日にちの意味があるからだ [BRINTON 1894; KARTTUNEN 1992:246]。これらによると、各人にはそれぞれに対応する動物（コヨーテ、イヌ、ウサギ、シチメンチョウ、ジャガー、サルなど）がいて人間と同じような人格をもち、かつそれぞれの価値観をもってまったく別の世界で生きている。これらのナグアル動物は、それに対応する人間に善良あるいは邪悪な力をもっており、さまざまな形で対応する人間の生活を支配する。人はシャーマンや伝統的慣習 (costumbre) の司祭の助力なしにはそのナグアルを知ることもできないし、その動物の種類がわかったとしても、どの個体が自分のナグアルかもわからない。これらの「同一化の様相」では身体性（-）と内面性（-）の類比主義 (analogism) という用語 [DESCOLA 2006:7-8] が最適だと私には思われるのが、その根拠は人びとが説明する次のようなことばである：「君のナグアルが死ぬとき、君も死ぬ。あるいは君が死ぬときには、君のナグアルも運命をともにする」。

ナグアル信仰は人間と動物はそれぞれ完全にパラレルな世界の住民で（たぶんカレンダーなどに支配される生まれた日時にしか存在しない）特異な時間的結節点を除いて両者が邂逅することはない。シャーマンなどが占いを通して我々がどのナグアルをもつのか診断してくれることはあっても、それを知ることはほとんどない。ハゲタカ男と人間のあいだの「同一化の様相」とナグアルのそれとは異なることから、メソアメリカでは、少なくとも2つの「同一化の様相」があることが認められる。

人間を動物と異なる存在であり、かつ人間は万物の霊長と見なし、動物を蔑む世界観があるが、近代西洋の人間中心主義 (anthropocentrism) はその代表である。しかしながら、古代から現在にまで西洋思想のなかには、人間中心主義への反省——あるいは種間相対主義への誘惑——が伏在し、しばしば動物の行動様式や性質を人間のそれらよりも高い価値をおいて讃美する観念複合体 (ideal complex) が見られるという [ボアズ 1990:139]。これをセリオフィリー (theriophily, 動物優越論) といい提唱者の思想史家のジョージ・ボアズは、これをプリミティビズム (未開 [崇拜] 主義) の形成にも貢献

した思潮で古代ギリシャにもその淵源を遡れるものであるとしている [BOAS 1933:1-2]。ボアズがまとめるセリオフィリーのテーゼは次の3点である。(1) 動物は人間と同じくらい理性的である(仮にそうでなくても動物は人間よりも「幸福」だという付帯条件がつく)。(2) 人間にとって自然は継母かもしれないが、動物にとっての生母は自然であり、それゆえ動物は幸せである。(3) 動物は人間よりも道徳的である [ボアズ 1990:139]。おしなべて歴代のセリオフィリスト(動物優越論者)にも言えることだが、その主張は思想的にはそれほど洗練されてはおらず「怠惰な農夫」が空を舞うハゲタカを見て、それを憧れるような(屈折はしているが素直な)人間中心主義批判のようにも思える。

人間の衣装をハゲタカのもので交換して後悔する(元)怠惰な農夫の末路に私たちは感情移入して、畑では一生懸命働かねばならないという教訓は誰でも引き出すことができる。しかし我々は、ヴィベyro・デ・カストロがとった観点主義(perspectivismo:ポルトガル語、以下同様)に倣って、アマゾン低地の先住民の思考法においては、それぞれの生物種は「内的様態(forma interna)」あるいは「動物の精神(espirito do animal)」を着ている存在に過ぎない[VIEROS DE CASTRO 1996:117]ものだとなれば、彼がいう西洋の多文化主義へのアンチテーゼとしてある先住民の多自然主義(multinaturalismo)の観点に立つて、我々はどうしてハゲタカの立場からメソアメリカの寓意を理解しないのかという彼の批判について我々は開襟して聞かねばならない。高い空から人間を長く観察していたハゲタカは意思の弱い怠惰な人間と交渉して両者の衣装を交換し、結果的に人間の奥さんを得ることができ、それまでの怠惰な評判だった農夫の名誉を挽回してあげて、その後幸せに暮らしたというのが、ハゲタカの言い分であろう。

ここには、近代理性が要求する人間の内面と外面の一致という窮屈な倫理的規範に思い悩むことなどは、人間とハゲタカの衣装の交換の寓意によって、簡単に克服することができるが見事に示されている。主体性をもつ動物(=人間)においては、視点をズラすこと、すなわち認識論的相対化は、その後の生き方において反省的な効果(=反射)をもつ点で、存在論的とまではいかぬものの、生活実践上の相対化をもたらすものである。翻ってみれば、長年のあいだ文化人類学や比較精神医学——さらにはその先祖たる比較宗教学——は、人間においては魂が大切である、すなわち人間の魂中心主義のイデオロギーに毒されてきた。これによると、共に人間中心主義の科学として人間の魂を動物の魂よりも上位にもってきたがるものである。そのため、このような人間と動物の衣服の交換という現象を、いかにもファンタジーだとして捨象し、我々に反省心をもたらす追真にせまるものとしては考えてこなかった。その代わりに、人間の魂が動物のそれにハック(=乗っ取られる)される人格の変化に関する現象を「憑依」という術語で表現してきた。この場合、不幸なことに、人間の魂が抜け落ちてあるいは脇に退けられて「より低級の」動物の魂にハックされるのがこの現象だと表現されてきた。そして憑依された身体は、乗っ取った魂により動物らしく振る舞うという。他方、ハゲタカの物語は、この憑依概念とはかなり趣を異にして、機知に富むハゲタカが怠惰な農民の衣装と交換することで、農民の怠惰の汚名を雪(すす)ぎ、どんな人間でも社会的に更生することができるという、反

近代的な啓蒙——言うまでもなくこれは撞着語法である——の寓意として特異な主張をしているように思える。後者の主張によると、人間は外側に現れる行為こそが重要であり、その内実を占める魂は、人間本来のものであろうが動物のものであろうが、どのような種類のものでも別にかまわないことになる。すなわち「魂に貴賤なし」である。魂（プシュケー）の相対化の寓意として、これほど強力なものはないだろう。それは、私のような怠惰な文化人類学者のみならず、プシュケーの科学に仕える勤勉な諸兄諸姉にも同じ事だと思えるのである。

文献

- ボアズ、ジョージ「自然」 フィリップ・P. ウィーナー編『西洋思想大事典』荒川幾男ほか訳、第2巻、Pp.266-271、平凡社、1990年
- BRINTON, Daniel Garrison . 1894. *Nagualism, A Study in Native American Folk-lore and History*. Philadelphia: MaCalla.[also: <http://www.gutenberg.org/ebooks/26426> (最終確認日 2011年5月5日)]
- BOAS, George. 1933. *The happy beast in French thought of the seventeenth century*. New York, Octagon Books.
- DESCOLA, Philippe 2006 "Beyond Nature and Culture," *Proceedings of the British Academy* 139: 137-155. (<http://old.eu.spb.ru/news/files2007/descola.pdf> last date confirmed on May 4, 2011)
- KARTTUNEN, Frances. 1992. *An analytical dictionary of Nahuatl*. Norman : University of Oklahoma (p.246)
- VIVEIROS DE CASTRO, Eduardo. 1998. Cosmological Deixis and Amerindian Perspectivism. *The Journal of the Royal Anthropological Institute, NS*, 4:469-488.
- _____, 2002. Perspectivismo e multinaturalismo na América indígena. In *A inconstância da alma selvagem* (pp. 345-399). São Paulo: Cosac & Naify.

註) この民族誌資料（一部）の収集には、科学研究費補助金・基盤研究（B）「人間と動物の関係をめぐる比較民族誌研究：感覚とコスモロジーからの接近」（代表者：奥野克巳：2008-2011年度）により可能になりました。関係者に感謝致します。

American Black Vulture：学名 *Coragyps atratus*

池田光穂，2012「ハゲタカ物語」『臨床精神病理』（日本精神病理・精神療学会）33巻1号 Pp.3-6